

## 《特別養護老人ホーム美咲ヶ丘における音楽の効果と役割》

～15年間の経緯とM氏の事例～

社会福祉法人敬寿会 美咲ヶ丘

事務次長・音楽療法講師 村口 都

### 【はじめに】

社会福祉法人敬寿会 美咲ヶ丘(北九州市小倉南区)は、平成9年開設以来、介護サービスの柱のひとつとして、特別養護老人ホームとデイサービスにおいて音楽療法を取り入れてきた。

平成24年6月、開設15周年を迎え、歳月を振り返りながら、特別養護老人ホーム美咲ヶ丘の音楽療法と一事例を報告する。

### 【施設紹介】

入所者 70名 (男性14名 女性56名)

平均年齢 87.2歳 平均要介護度 3.8 (平成24年5月末現在)

### 【経緯】

開所当時は申し込み順に入所出来たため、入所者のレベルも良く、全職員が療育音楽指導者養成研修会を受講し、常時5～6人の職員がセッションに関わることができていた。しかし、平成15年、北九州市が全国で2番目に取り入れた入所判定基準(通称 北九州方式)により緊急度の高い方、重度の方を優先して入所させるようになった。

そのため、美咲ヶ丘においても、年々入所者は重度化し、職員も介護業務に追われ、入所者とのゆとりある時間を保つことも厳しい現状である。

その中で、開所以来定期的におこなっている療育音楽は、入所者のADL・QOLの改善、向上はもちろん、入所者間、そして入所者と職員間の大切なコミュニケーションツールとなっている。また、入所者の家族と一緒に参加することも多々あり、家族の理解も得られている。

余談ではあるが、筆者は常勤事務次長としての役職もあり、日々、音楽療法以外でも入所者に関わりを持っているが、入所者にとっては「筆者＝音楽」であり、「今日、音楽はあるの？」と尋ねられる事は日常茶飯事である。このような入所者の反応からも、音楽療法の定着度がわかる。

しかし、先に述べたように、入所者の重度化により、筆者自身も職員に負担をかけないよう以下のように工夫しながら音楽療法をおこなうべく心がけた。

### 【実施状況】

場所 特養2階ホール

日時 毎週火曜日14時～15時(以前は週2日各A・Bプログラムを分けて実施)

平均参加人数 約30名

職員サポート 不定(多くて2名) 筆者一人のセッションも多い

内容 療育音楽 A・B合同プログラム 選曲、LD動作など臨機応変に対応  
ホールの和室スペースにも体動の多い重度の方を誘導し自由に参加を促す

楽器 タンバリン、スズ、シェーカー

(対象者のレベルに合わせて持ちやすく鳴らしやすいものとして、また、楽器の配布、回収をスムーズにするため2種類を選択。シェーカーは飲料と  
思い込み口にする対象者が増えてきたため、レベルに合わせ配布)

その結果、セッションの形態は少しずつ変化しながらも、入所者第一に考え、セッションのシンプルな流れによる無理のないプログラムで対応したため、入所者の反応は以前と変わらず継続できている。

このような、音楽療法の中から、効果の現れとして、M氏の事例を述べる。

#### 【M氏 概要】

88歳 女性 要介護5 長崎県五島市福江出身

長谷川式スケール 0点(測定不可) 疾患名 認知症 高血圧 骨粗鬆症

性格 若い頃から身体を動かすことが好き 思いやりがあり穏やか

平成24年5月末現在、特養入所後10ヶ月経過

#### 【経過】

平成19年10月 デイサービス美咲ヶ丘にて、初利用当日セッション初参加  
積極的ではないが、スズを振り自然に馴染んでいる。

その後、認知症が進行し多動が見られ落ち着かない

平成23年 6月 転倒骨折にて入院 歩行不可にて車椅子使用となる

7月 特養入所

入院中、病院では不穏、体動多く4点柵ベッド、抑制服使用で拘束されていたが、美咲ヶ丘では身体拘束をせず、転倒防止のため和室の居室にて対応 多動にて目が離せない

入所11日後、ホールの和室スペースにてセッション参加  
体動多く全く集中できず 傾眠状態も見られる

9月 時々、音楽に合わせて手でリズムをとる

10月 「かかし」を泣きながら歌う

12月 スズに興味を示しスズの色(赤・緑)で「音が違う。私はこっちの(緑)の音が好き」と発言  
(視覚的感覚で音色が違うと思ったようだ)

平成24年 3月 マイクを差し出すと「春が来た」など大きな声で歌う

その12日後、家族面会時、居室にて家族の前で「桃太郎」「あんたがたどこさ」を歌い、家族も驚く

- 4月 「さくらさくら」を正座し不動の姿勢で歌う  
(日本古謡なので国家斉唱のように厳かな歌と思ったのか?)  
「でんでらりゅうば」を歌い、その後、居室などでも「でんでんでんでん・・・」と口ずさむ様子が頻繁に見られる  
「でんでらりゅうば」に対する反応が強い
- 5月 職員の声かけにより自らの意思で参加  
歌唱も声がしっかり出ていて、アイコンタクトも取れ、セッションリーダーの声かけが伝わり、リズムをとったり手を上げたり、とても反応が良い

#### 反応の良い曲

「でんでらりゅうば」「さくらさくら」「ふるさと」「桃太郎」「春が来た」  
「あんたがたどこさ」「茶摘み」「炭鉱節」「二人は若い」「リンゴの唄」 etc.  
わらべ歌、唱歌、童謡は発語も良く、歌謡曲は歌詞が覚束ないこともあるが、正しいメロディやフレーズを笑顔で口ずさむ

#### <M氏と筆者との会話の一部>

- ・「でんでらりゅうば」について  
「福江(五島)の生まれで(でんでらりゅうばは)昔、歌っていた。(指遊びは)したことがない。」 「言い伝えで覚えた」
- ・歌に対する興味について  
「歌は好きだけど下手だから・・・」 「(歌番組は)よく見ていた」  
「下手と人から言われたから、みんな(家族や他人)の前で歌ったことはない」

#### <M氏の家族の談話と様子> (職員から音楽療法の様子を聞いて)

「昔は、恥ずかしがり屋で歌なんか一度も聴いたこともない。」  
「子守歌さえも歌ってもらったこともない。」  
「歌を歌うんですか!？」と驚きを隠せない  
その後面会時には、家族がM氏に歌唱を促し、家族も一緒に歌い笑いが絶えず、とても喜ばれている。

#### 【考察】

海外では、個人療法が多く、日本での集団療法のあり方も問われている。(参考文献：日本音楽療法学会誌 Vol.10/No1)

しかし、美咲ヶ丘においては、集団療法ならではの相乗効果が多く見られる。

参加者同志のコミュニケーションも取れ、集団としての一体感、達成感、共感も得られ、また、1時間のセッションでの集中力、持続力は、他のレクリエーションとの差は明らかである。

筆者が音楽で入所者と関わる時間は、入所者の生活の一部に過ぎないが、この音楽療法を15年間継続できたことは、筆者ひとりの力ではなく、入所者の参加意欲があったからであり、それをサポートしてくれた職員の影の力は否めない。

M氏の場合も、自由参加の自然な流れのセッションの中で、そして、日常生活の中でも職員からのアプローチは大である。

M氏も入所当時はコミュニケーションが取りづらい状態であったが、音楽療法開始時に比べ、会話も増え、表情も穏やかになってきた。

また、M氏の「でんでらりゅうば」に見られる強い反応は、音楽療法の選曲の影響の強さを見て取れる。

「でんでらりゅうば」は、長崎で、カステラのCMや長崎空港のBGMでも使用されている古いわらべ歌だが、昨今、NHK Eテレの子供番組や、車のCMで全国的に知られるようになった。筆者は長崎の隣県の出身のため、既知曲であったが、ここまでブームになるとは思わなかった。

ただ、M氏は重度のため自らテレビを見ることもなく、音楽療法が回想のきっかけを作ったと言える。M氏本人の心の領域に突っ込むことで回想法となり、本人に訴えるものがあつたのではないだろうか。全国的に知られている歌謡曲、童謡、唱歌、民謡と違い、地域に根差したわらべ歌は、特に長崎出身であるM氏を突き動かす何かがあつたと思われる。

因みに、他の入所者W氏は長崎県対馬の出身だが、「でんでらりゅうば」は知らないと言う。同じ長崎県でも、地理上、船の航路など交通機関の影響で生活圏が違う。M氏の出身の五島は長崎市、W氏の出身の対馬は福岡市が生活圏なので、長崎のわらべ歌でも曲の浸透していく経緯は変わっていく。

地域性のある曲は、全国の人が知らない特異な存在であり、特に地域に密着した方言を使った曲（「でんでらりゅうば」や「おてもやん」など）、また、民謡（「炭坑節」など）は、民衆の中で昔から自然に伝承され歌い継がれた、計り知れない曲の深さがあり、だからこそ、記憶の奥まで響くものがあるのではないだろうか。

まさに、県民性や地域特性を生かした音楽療法の原点に出会えたように思えた。

## 【おわりに】

作家オスカー・ワイルドは「音楽は涙と記憶に最も近い芸術である」と述べているが、美咲ヶ丘で音楽を媒介に携わっている者として、入所者の記憶を紐解きながら、ひとりひとりの『心の扉を開ける場』を提供していけるよう、今後も研鑽を積んでいきたい。